

ミニ展示「戦後80年 あのととき新聞は何を伝えたか」1945年10月展示紙面リスト

1945年4月の出来事	新聞名	新聞日付	補足説明
政治、宗教、民権の自由 治維持法等撤廃指令 ／東京五紙に検閲拡張実施	毎日新聞	1945年10月6日	連合国軍総司令部（GHQ）は10月4日、「政治的・民事的・宗教的自由に対する制限の撤廃に関する覚書」を発表した。思想・宗教・集会・言論の自由を制限する一切の法令の廃止などを命じた。一方で、GHQが9月14日以来同盟通信に行っている検閲を、在京5紙にも実施するという記事も載っている。
幣原新内閣成立／幣原内閣の八大政綱	読売報知	1945年10月10日	東久邇宮内閣の後を受け、10月9日、幣原喜重郎内閣が成立した。基本的政策として、民主主義政治の確立、食糧問題、失業問題、行政の整理・刷新など8つを挙げた。「新顔片影」という囲み記事の中で、外相として国際協調を重視した「幣原外交」は軍閥には不評だったが、「彼はこの信念を野に在っても節守してきた」と紹介した。
帝国憲法の改正／憲法の自由主義化 マ元帥 政府に要求／同盟通信の解散決定	朝日新聞	1945年10月13日	トップ記事は、近衛文磨が佐々木惣一（元京都帝大教授）とともに憲法改正草案の作成に着手することを伝えた。隣の記事は、GHQのマッカーサーが10月11日、新任挨拶で訪れた幣原首相との会談の中で「憲法の自由主義化」を示唆し、「婦人の解放」「労働組合の助長」「学校教育の自由主義化」など五大改革を要求したことを紹介。同盟通信の解散決定を伝える記事もある。解散後、通信社業務は共同通信と時事通信に引き継がれた。
婦人に参政権付与 男女とも満二十歳	朝日新聞	1945年10月14日	政府は10月13日の臨時閣議で、衆議院議員選挙法改正について討議した。女性参政権を認めるとともに、満25歳以上だった選挙権が満20歳以上に引き下げる方針を決めた。改正法は同年12月に公布、翌1946（昭和21）年に戦後初の衆院選が行われ、39人の女性議員が誕生した。
日本軍完全に消滅 マ元帥・全世界に放送	読売報知	1945年10月17日	マッカーサーは10月16日、全世界に向けて、日本軍武装解除完了の放送演説を行った。「戦時であれ、平時であれ、またわれわれ自身の手によってであれ、他国の手によってであれ、かくも摩滅なく武装解除が行われたことは史上その例を知らない。日本に対しては陸海空軍関係のすべてのものが禁止されたのである」などと述べた。
馬の首や“自由の女神” 米進駐軍の部隊マーク	朝日新聞	1945年10月1日	米兵の所置部隊の見分け方教えます 進駐米軍を街で見かけるようになる中、米陸軍兵の腕に付いている部隊ごとに異なるマークを解説した。マッカーサーの「親衛隊」として一早く東京に進駐した騎兵第一師団は、右列の上から4番目、左列の上から3つ目の「自由の女神」は、グアム島からレイテ島を経て沖縄に進駐した第77師団だとの説明がある。色分け方式だった日本軍とは対照的で、「色とりどりに美しく、特異の異名を持ちその思いつきや図案に頭を絞ったとがうかがわれる」としている。
日本の殺人光線 米調査団が解剖	朝日新聞	1945年10月8日	「殺人光線」殺傷力はネズミ1匹 日本では登戸（川崎市）の第九陸軍技術研究所で殺人光線の研究が行われていた。1944年度の実験で十分な見込みが立ち、45年度の研究に対し100万円が支出され、116人が研究に専念していたという。しかし、その成果を米科学団が調査したところ、30メートルの距離でネズミ1匹を殺す程度。兵器として無価値だったと酷評された。
好評の街頭公衆電話	朝日新聞	1945年10月19日	街に卓上電話現れる 公衆電話の設置が間に合わず、通信院（運輸通信省の外局だった通信院が改称）は公衆電話を駅前などに置いて通話所を開設した。電話料金の受け取りなどに、普段は声でしか接しない電話交換手が駆り出された。電話交換手は女性の花形職業とされていた。
ふえる紙の配給	毎日新聞	1945年10月25日	パン（コメ？）のみに生きるにあらず 戦後増産が図られたのは食糧だけではない。人々は活字にも飢えていた。1945（昭和20）年度第3四半期（10～12月）の紙の需給計画は、第1四半期（4～6月）に比べて、全体として46%の増加だったという（新聞巻取紙1118万ポンドで、3%の増加）。河相達夫情報局長は閣議で「従来新聞紙の発行部数は1400万程度であったが用紙制限のため現在は1113万程度に落ちているので増産用紙はこの方面に振り向ける方針である」と報告した。用紙制限は情報統制の手段となっていた。
真珠湾前夜 軍閥罪悪史の序章	読売報知	1945年10月30日	レーダーもないのに、勝てたまるか！ 戦争の「真相」が明かされ始めてきた。真珠湾攻撃開始前から、日本の潜水艦隊は真珠湾における米太平洋艦隊の動きを潜望鏡でキャッチしていた。しかし、この作戦に参加した将校のほとんどは、終戦までに太平洋諸海域に散ったという。記事に「電探（電波探信儀＝レーダー）によって止めを刺された」とある通り、日本軍はレーダーの配備が遅れていた。「艦本（艦政本部）の馬鹿共め何をしとるのか、俺らをめくら（レーダーがない）にしようて目明きと喧嘩させを。勝てたまるかつ」という大佐のセリフが、むなしく響く。この紙面はほかにも、食糧事情が逼迫し大学などが休校、戦車が開墾に役担うなど、興味深い記事が多い。